

研究室の窓から



卒研指導と産地調査

井上秀次郎

多くの学生にとつては、大学が最終の学校教育期間となる。そうだとすれば、大学は、これまでの初等・中等教育における様々な問題、たとえば不登校、いじめ、落ちこぼれ、クラブ活動の過熱化、校則などの問題を背負ってきている学生たちを受け入れる教育機関ということになる。これらの問題を背負った、自立と全面発達を阻害されてきた学生たちに、最後の

教育機関として、人間発達と学力向上を保障する機関としなければならぬ。

最近は大学の開放がうたわれているが、教育施設の開放だけでなく、管理主義教育からの学生の開放が求められているのである。現在進められている大学改革は、管理強化のためや研究中心であり、学生教育について真剣に考えられることは少ない。学生教育について述べられる場合でも、多くはカリキュラムについてである。入学してくる十八歳以前の環境について考えられることは、ほとんどなかったといえよう。

さて最近の学生は、ゼミで討論することとはほとんどない。一人ひとりに発言を求めると、せいぜい難しい専門用語の意味を質問してくるのが関の山で、討論に発展することはまずない。

そこでゼミナールの運営については少しずつ改良を施してきた。できるだけ学生の自主性を育て、集団的に運営し、学生間の人間関係を深めるよう工夫してい

る。例えば、ゼミ生全員何らかの任務を役割分担する。会計係は、ゼミ員から毎月百円の会費を集め、遅刻、無届欠席者からは罰金を徴収する。会費や罰金は、ゼミの時間のコーヒー代や毎月一回程度開く昼食会などの資金にする。ゼミではいつも学生達自身でコーヒーを準備し、後片付けもゼミ生達でやる。

今年のゼミは「国連・子供の権利条約」を読んだ。反応は今一つなので、次回からは条約だけでなく解説本も読んでどうかと思っている。ここでは四年の卒研ゼミを紹介したい。

四年生の卒研ゼミのテーマは、毎年地場産業の実態調査とその活性化の方策である。指導の基本は、自立と全面発達である。といってもゼミは、留年生優先である。年度末には例年再発表ということになる。完璧というわけにはいかない。

さて、学生はまず四月にはいるとテーマを決めるために合宿する。そこで自分のやりたいテーマを出し合い討議する。

そして最終的には二つぐらいのテーマに絞り、グループ編成を行なう。テーマが決まればまずその現地に視察しに行く。

例えば島原手延べ素麺をテーマとして選んだとすると、その産地である有家町・西有家町とその周辺を車で一巡し、まず感覚的に地域の雰囲気や肌で掴むようにする。町役場から聴取調査をし、数カ年分の町報や資料提供を受ける。工場見学もするし、現地で合宿もする。スライドやビデオ撮影をすることもある。

手延べ素麺といつてもかなり機械化が進んでいる。そこで機械素麺とどう違うのか議論がはずむ。結局、機械素麺産地の佐賀県神崎町へ行くことになり、工場見学と聴取調査を実施した。百聞は一見に如かずである。一目瞭然、機械や工程の違いが明瞭になった。神崎は吉野ケ里遺跡のある町である。帰路は佐賀パルーン・フェスタの最中であり、いろいろな形をした熱気球が空いっぱい浮かんでいた。夏休みには、各自の郷里に近い手

延べ素麺産地を調査してやることになった。学生たちは、三輪、小豆島、播州の産地に行つて調査してきた。

こうして何度も現地足を運んで、自ら体で産地の現状を掴んでいく。そして集めた資料をもとにアンケート調査の作成に取りかかる。アンケートは産地の実態をよく知っていないと、とてもできない。アンケート用紙作成の段階で、また現地へ行つて確かめることもしばしばである。調査用紙が作成されると、その用紙をもつて産地の工場を一軒々々廻り、調査の依頼をする。サンプル数は、信頼性を確保するため五百以上は回収するよう指導する。

さて、回収・集計を終えてもすぐに論文作成に取りかかるのではない。集計は地域・職業・性・年代別などに分類する。回答結果の分析も、一問ごとに分類別に徹底的に議論する。それでも理由が分からない結果が二〜三は出る。分からない点は、再度、産地に行つて調査し確かめる。

この繰り返しを何回もする。こうした結果を、調査報告書としてまとめる。報告書は、調査方法、集計結果、結果の分析の三部で構成される。報告書の完成によつて、やっと卒論の作成に取りかかる。最後に、このような方法による卒研指導の長所を集約しておきたい。

①グループによる集団性の養成。一人でも欠席すると調査が進まない。
②自主性、主体性の確立。理論的研究と違い、行動しなければ論文が書けない。従つて自ら考えるようになる。

③全面発達の可能性を高める。産地調査には全面的な知識と能力が要求される。地場産業の特徴は、古い歴史、伝統技術の継承、地域に根づいた存在などである。芸術的価値の高い伝統工芸品であることも多い。調査には統計学の知識もいるし、パソコンで集計することもある。

今後の課題は、シラバス（授業計画）の作成や授業評価における学生参加の導入と考えている。（長崎総合科学大学）